

編集後記

「藤女子大学国文学雑誌」第九十五号をお届けする。

昨年度、丸山先生の急逝を受け、先生に非常勤講師として担当をお願いしていた「日本文学概論」前後期各十五コマを、教職免許の必修科目ということもあって休講にはできないため、学科教員全員で分担して何とか乗り切ろう、ということになり、筆者も3コマを分担することとなった。教員も授業が増えるのは大変だったが、オムニバス形式で数回ごとに担当者が変わるの、学生諸君もやりにくかったことと思う。行きがかり上、筆者がシラバスの作成も担当することになったのだが、シラバスを書きながら感じたのは、実は、こりや案外面白い、ということだった。全くの門外漢（一応専門分野は中国思想史が中心です）が「概論」を担当するのも無謀なことだと思いが、専門外から見るときに、「日本文学」とはどういうものなのか、どのようなものだと説明すればよいのか、ということを否応なしに考えることになったわけで、これは筆者にとつて非常に新鮮な経験だった。

「概論」とは、その領域の全体的な広がり、輪郭を示したうえで、様々な主要な下位分野のあらましとそれへのアプローチ方法等々を提示するもの、と、取りあえずはいえるだろう。そこで筆者が担当した回では、文学と思想の境界領域を扱い、もって「日本文学」の輪郭の一端を示してみようと考えたのだった。その試みが成功したかどうかはわからないが、貴重な経験をさせていたのだ、と考えている。

その担当回が巡ってくる時期は6〜7月の前期終盤であったが、その時期に、たまたま「テーマ研究」授業の当番と藤女子大学日本語・日本文学会の研究発表も重なっていて、それぞれの準備に追われて徹夜を重ねたため、授業はきつとへ口へ口だったこ

と思う。今更ながら、学生諸氏にはどうぞご勘弁願いたい。この「テーマ研究」とは専門分野を異にする複数の教員が共同で担当する授業であるが、この授業を担当する際にも、また日文学会の研究発表を担当する際にもいつも思うのは、やはり「外部の目」の貴重さ、あるいは「外部の目」を意識することの大切さ、ということである。時に「外部の目」に晒されることにより、自分の扱っている領域の輪郭や位置づけ、意義といったものが（いくらかは）明確化されるように思うのである。

大学全体のカリキュラムの再編成を議論する会議に携わる中で、「外部の目」からそれぞれの領域に対して相互に意見を述べ合う機会も増えては来ているが、まだまだ突っ込んだ議論ができていないとも感じている。ふと、昨年度の経験を思い出してみただ次第である。（名畑）

二〇一六年十一月二十五日

二〇一六年十一月三十日

藤女子大学 国文学雑誌（第95号）

定価 五〇〇円 送料八〇円

振替 〇二七〇〇一四一六八〇七番

編集人 菅 本 康 之

発行人 札幌市北区北十六条西二丁目

発行所 藤女子大学日本語・日本文学科研究室内

藤女子大学日本語・日本文学会

印刷所

札幌市中央区北六条西十五丁目

㈱491アヴァン札幌